

# 神のやま

第3号



# 三ツ山大祭と保存会に期待を寄せて

井戸 敏三



射楯大神、兵主大神が、日本全国の神々を三つの山にお迎えし、もてなされる二十年に一度の祭礼「三ツ山大祭」。一四〇〇年以上の歴史をもつ播磨国総社射楯兵主神社に連続と受け継がれてきたこの祭りは、最近では、平成二十五年三月三十一日から一週間にわたり盛大に執り行われました。地域が一体となって準備し、子どもから高齢者まで多くの方々の手によってつくりあげた結果、予想をはるかに上回る六十五万人が訪れ、姫路の街に大きな賑わいをもたらしました。

私も、中の日大祭と神幸祭に参加しました。神門前に天高くそびえ立つ二色山、五色山、小袖山の圧倒的な存在感や、地元高校生などによって作成された「お菊井戸」や「中国大返し」などの見事な造り物、ご家族やお友達と交わす見物客のたくさんの笑顔が大変印象深かっただけに、五年が経った今も私の記憶に鮮明に残っています。

今年には兵庫県政一五〇周年、兵庫の新たな飛躍のとき。時

代が成長から成熟へと移るなか、県民だれもが夢や希望をもっていきいきと活躍できる新時代の兵庫づくりに取り組んでいかなければなりません。その主役となるのは、ふるさと兵庫を愛する県民一人ひとりです。生まれ育ったふるさとに愛着や思い入れがあるからこそ、地域の将来を考え、さまざまな課題に取り組む活動も生まれるのです。

とりわけ、その鍵となるのは次代を担う子どもたち。三ツ山大祭のような歴史的祭礼や伝統文化に触れる体験は、子どもたちの豊かな情操を育み、ふるさと意識の醸成につながるのではないのでしょうか。子どもたちには、地域のなかで元気に遊び、さまざまな祭りや行事での体験を通して、思い出さなければいふるさとしてほしい。そう願っています。そのため、県では、伝統文化の継承・発展、文化資源の活用等の支援に力を注いでいます。

そうしたなか、三ツ山大祭と六十年に一度の一ツ山大祭をあわせて、国の重要無形民族文化財指定をめざし、平成二十七年、「播磨国総社 一ツ山大祭・三ツ山大祭保存会」が発足されました。

保存会では、祭礼についての見識を深めるとともに、その保存と継承、時代にあった祭礼のあるべき姿の検討のため、

シンポジウムや研修会、造り物学習会、会報誌の発行などに取り組みられています。伝統文化を守り、育む皆様の活動に心から敬意を表します。

射楯兵主神社、一ツ山大祭・三ツ山大祭保存会の皆様、両大祭をよりよい形で次の世代へ引き継いでいってください。祭りを経験した子が親となり、次の祭りをその子どもと楽しむ。そのようにして、末永く両大祭が受け継がれていくことを願っています。

関係の皆様のご健勝でのご活躍と、次回、二〇三三年の三ツ山大祭、二〇四七年の一ツ山大祭に向けて、皆様の活動の輪が大きく広がっていくことをお祈りします。

【みみづく第二二〇号（播磨国総社 社報「みみづく」に寄せて）  
平成三十年十月一日発行より転載】



兵庫県知事 井戸敏三氏  
兵庫県たつの市新宮生まれ  
東京大学法学部卒業

## 「播磨国総社丁卯大祭礼図」に見る 明治十八年の一ツ山大祭

播磨学研究所副所長 小栗栖 健 治

### はじめに

播磨国総社には一ツ山大祭と三ツ山大祭が伝えられています。一ツ山大祭には大きな「山」を一つ、三ツ山大祭には大きな「山」を三つ、それぞれ神門の前に築かれます。もともとも直近に行われた一ツ山大祭は昭和六十一年、三ツ山大祭は平成二十五年のことでした。現在、一ツ山大祭は六十年に一度、三ツ山大祭は二十年に一度行われています。

江戸時代、一ツ山大祭は「丁卯大祭礼」、三ツ山大祭は「臨時大祭礼」と呼ばれていました。江戸時代以降に行われた一ツ山大祭は、正保元年（一六四四）、元禄十四年（一七〇二）、明和五年（二七六八）、文政八年（一八二五）、明治十八年（二八八五）、昭和三年（一九二八）、昭和六十二年（一九八七）の七回です。一ツ山大祭は三ツ山大祭の周期の三倍になりますので、三ツ山大祭に比して資料は概して少ないというのが現状です。とりわけ、一ツ山大祭を描いた絵画資料は少なく、三ツ山大祭との相違点を具体的に明らかにすることはできていませんでした。

近年、明治十八年の一ツ山大祭の様子を描いた一枚の刷り物が確認されました。この刷り物には「射楯兵主神社縁起」と記されているのですが、内容が分かるように便宜的に「播磨国総社丁卯大祭礼図」（以下、祭礼図）を資料名としました。この祭礼図は、私たちにどのような情報をもたらしてくれるのでしょうか。

### 一 明治十八年の「播磨国総社丁卯大祭礼図」

佐良和村（姫路市飾東町）の小林彌之助という人が、明治十八年の一ツ山大祭を見聞した覚書（播磨国総社文書）を残しています。二十三か所に造り物が飾られ、「惣社ニテハ一ツノ大山ヲ築キ、能舞台」が設けられていたこと、家々が飾る提灯などで夜も白昼のようであったこと、興行物は多く芝居は大入りであったことなど、賑わいの状況が記されています。ただ、この記録からは、一ツ山がどのような「山」であったのかなど神事の具体的な様子を知ることができません。

その点を明らかにするのが、「播磨国総社丁卯大祭礼図」です。祭礼図の寸法は、タテ三十七・三cm、ヨコ五十一・一cm。木版多色刷り、洋紙に印刷されています。全図は【資料1】のとおりです。この祭礼図は巻物を開いた様子で仕立てられ、画面の構成は右から射楯兵主神社略縁起、境内と祭礼の様子、刊記に分けられています。

この祭礼図は、姫路綿町の高橋孝蔵を編輯人、五軒邸の黒田千穎を出版人として明治十八年四月八日に出版されました。売捌人は光源寺前の竹中義正と東二階町の岸本専吉、頒価は一枚二錢五厘でした。明治十八年の一ツ山大祭は、三月二十二日から三十日にかけて行われましたので、この祭礼図は大祭終了後に印刷頒布されたことが分かります。祭礼図に描かれた内容は、それだけに信憑性が高いと考えることができます。

### 二 射楯兵主神社縁起



【資料1】播磨国総社丁卯大祭礼図 明治18年（1885）



【資料2】播磨国総社丁卯大祭礼図の場面説明

①千穎

かままつる 国の民草 さかゆらし

この山まつの いろをためしに

②ハク口城（白鷺城） ③本社 ④ソウ社（総社）

⑤影向松 ⑥社ム所（社務所） ⑦神明社

⑧ヒルコ社（蛭子社） ⑨オタバ所（御旅所）

⑩能ブタイ（能舞台） ⑪招魂社 ⑫陸軍カイコウ社（偕行社）

⑬圓嶺写（印） ⑭射楯兵主神社之印

※参考

①千穎（黒田千穎）は明治期の播磨を代表する歌人で、多くの門弟を擁した。

⑫偕行社 陸軍の施設。

⑬圓嶺（岩本圓嶺）は明治期に京都で活躍した円山派の画家。

射楯兵主神社略縁起は社務所によって記述されています。この縁起は、射楯兵主神社（播磨国総社）で行われる神事の中で、丁卯祭について書いています。意識すると、次のとおりです。

当社は延喜式神名帳に登載される射楯兵主神社で、大己貴命・五十猛命を祀っている。祭神が欽明天皇二十五年六月十一日丁卯の日に影向したことから、毎年六月十一日に影向祭を行い、六十一年目ごとに丁卯祭と称し、嘉永大永の頃より国司が大切に祀ってきた古くからの神事である。赤松屋形（播磨国守護）をはじめ池田・小寺・本多・松平、酒井の各城主はしきたりに倣い、式年には盛大な神事を行ってきた。酒井旧城主が行われた文政八年から今年が六十一年周年になるので、旧例のように神山を造り、古式のとおり神山に松樹八本を造植した。神前で流鏑馬を行い、能楽を奉納した。本社の左右別殿の播磨国十六郡百七十四座の総社を同様に祀り、国民の幸福を祈っている。この大祭は当社第一の祭りであるので、他国（播磨以外）の人に知ってもらおうと簡単に旧儀を述べさせていただいた。

次に、この縁起をもとに(1)一ツ山大祭の周期と祭日、(2)祭祀と祈願、(3)「山」の造形、(4)祭礼と芸能の四つについて検討を加えてみたいと思います。

#### (1) 一ツ山大祭の周期と祭日

欽明天皇二十五年六月十一日の丁卯の日に祭神が影向されたことにより、毎年六月十一日に影向祭を、六十一年目ごとに丁卯祭（一ツ山大祭）を行ってきたと記しています。明治十八年は前回の文政八年の一ツ山大祭から六十一年周年を迎えていました。本来、丁卯祭は干支の一巡ではなく、六月十一日が丁卯となる日に

執り行われてきました。明治十八年の一ツ山大祭は六月ではなく三月に行われており、先例である丁卯の日となる六月十一日より六十一年周年を強く意識した開催であったことが分かります。

#### (2) 祭祀と祈願

元禄十四年の一ツ山大祭の記録（播磨国総社架蔵「辛巳丁卯祭執行二付城主へ届出ノ古文書」。以下、元禄十四年はこの資料に拠る）には、天下泰平・国家安全を目的に播磨国の守護が主催する祭礼と記されています。縁起にも国司が大切に祀ってきた古くからの神事であること、中世には播磨国の守護、江戸時代には姫路城主が主催する祭礼と位置づけられていました。さらに、祭祀は本社とともに左右別殿の播磨国十六郡百七十四座の「総社」を同様に祀ることを記しています。

#### (3) 「山」の造形

元禄十四年の一ツ山大祭では、高さ約九m、横約六mの「山」に「作り松」（造花）八本を立て、「山」は苔むす岩のように造られていました。明治十八年の「山」は「神山」と称され、「古式」によりて松樹八本を造植」されていることから、江戸時代以来の伝統を踏まえた「山」であったことが分かります。

#### (4) 祭礼と芸能

一ツ山大祭の祭礼期間は、文政八年は六月七日から十三日までの七日間、明治十八年は三月二十二日から三十日までの九日間でした。元禄十四年は、「山」の前に「敷舞台」（仮設の能舞台）を造り、弓鉾指と流鏑矢（流鏑馬）が行われました。文政八年も同様に、「山」の下の舞台での能と弓鉾指・流鏑馬が行われていま

した。明治十八年も基本的に同様に行われたと考えられるのですが、弓鉾指については確認することができません。

三ツ山大祭では伝統的に競馬・弓鉾指・一つ物・神子渡・流鏝馬の「五種神事」が行われますが、一ツ山大祭では弓鉾指と流鏝馬のみ、また、城下から繰り出す謡囃子の行列もありません。ただ、三ツ山大祭と同様に城下の町屋の上を飾る造り物は行われていました。同じ城下町の「山」の祭礼ですが、内容に異なりをみることができます。

### 三 描かれた境内と祭礼

では、この祭礼図（資料2）は、総社の境内と祭礼の様子をどのように描いているのでしょうか。松に覆われた総社の境内には、桜が満ちています。上段に黒田千穎の和歌、中断に播磨国総社の境内、下段に一ツ山を配しています。南の神門を入ると拝殿、③「本社」と続き、その後方に④総社があります。本社の東側に⑤影向松と⑥社務所、西側に⑦神明社と⑧蛭子社、築地塀の西方には⑨御旅所が描かれています。神門の南に一ツ山（神山）と⑩能舞台、その下に⑪招魂社、相生の松原を越えて⑫陸軍偕行社、その右に茶屋が描かれています。当保存会会長の田中種男氏（昭和三年生）にお尋ねしたところ、「総社門前にみやげ物や飲食できる茶屋が一軒あったが、戦後はなくなった」とお話しくださいました。

祭礼の場面に着目すると、縁起が記しているように流鏝馬が神門前から御旅所へ向かって駆けています。一ツ山は青く苔むした岩のように造られ、山頂に「松樹八本を造植」し、社殿を戴いています。「山」の下には能舞台があり、ここで能が演じられたのです。

### おわりに

この祭礼図に描かれている明治十八年の一ツ山大祭は、江戸時代以来の伝統を受け継いでいることが分かりました。最後に、昭和六十一年に行われた一ツ山大祭と比較してみたいと思います。

① 昭和六十一年は苔むした岩山ではなく、三ツ山大祭の五色山が造られていました。

② 明治十八年は神門の上に社殿は造られていませんでしたが、昭和六十一年は、門上殿が設けられていました。

③ 明治十八年は流鏝馬（文政八年は流鏝馬と弓鉾指）のみでしたが、昭和六十一年は三ツ山大祭と同じ五種神事が行われました。

④ 明治十八年は能舞台が設けられていましたが、昭和六十一年は造られていませんでした。

①の五色山、②の門上殿、③の五種神事は昭和三年の一ツ山大祭の時に変更され、その形式が受け継がれています。④の能舞台は昭和二十八年以降の三ツ山大祭には造られていないので、それを習ったのと考えられます。一ツ山大祭が、丁卯の日となる六月十一日から干支の丁卯の年に変更されるのは昭和三年のことです。昭和三年の一ツ山大祭は昭和二年の丁卯の年に開催される予定でしたが、大正天皇の崩御により順延されました。

このように新たに確認された祭礼図は、そこに記された縁起、そして、描かれた境内と祭礼の様子からおよそ江戸時代の風俗を知ることができる、興味深い内容であることが分かったのです。

なお、保存会の会報誌の誌名は「丁卯祭礼図絵」の縁起に「旧例の如く神山を造り」（旧例のように神山を造り）とあることに依拠し、『神のやま』としました。

## 平成三十年度 保存会活動報告

### 播磨国総社 一ツ山大祭・三ツ山大祭保存会役員会開催

(平成三十年七月二十二日)



平成三十年度 播磨国総社 一ツ山大祭・三ツ山大祭保存会役員会を、総社会館にて開催しました。

当保存会が発足してより、四年目となる役員会の開催となり、役員三十一名の出席、三十名の委任状により開会しました。

保存会会長田中種男より、開会に際してご挨拶を申し上げると共に、播磨学研究所所長・神戸女子大学古典芸能研究センター客員研究員 小栗栖健治先生と姫路市立琴丘高等学校校長 宇那木隆司先生にオブザーバーをご委嘱した旨を報告しました。

引き続き各号議案の審議に入り、平成二十九年度の事業報告では「神のやま」第三号発行を報告すると共に、同決算報告を説明しました。

第三号議案では任期満了に伴う役員改選について説明し、役員ご辞退の申し出もなく役員の皆様にご留任いただきました。

平成三十年度事業計画・同収支予算についても慎重裡に審議され、一同異議無く承認されました。

### 小袖山に飾る小袖の陰干し

(平成三十年十月二十二日)



毎年恒例となりました小袖の陰干しを、十月下旬に総社境内にて行いました。

播磨国総社三ツ山大祭の三基の山の内、小袖山に飾る小袖を、当保存会々員の方々約二十名の奉仕により、小袖、羽織、襦袢を分別しながら、小袖約二〇〇領の陰干しを行いました。

小袖山には約八五〇領の小袖が必要となります。今後共、皆様からのご寄進をお待ち申し上げます。



昭和三年 一ツ山大祭古写真展

(平成三十年十一月十三日～十一月三十日)



播磨国総社御門にて、「昭和三年一ツ山大祭古写真展」を開催しました。小栗栖健治オブザーバー、宇那木隆司オブザーバーの指導のもと、今回は特に外国からの来訪者の方々と、英文のパンフレットを用意しました。

今から九十一年前の一ツ山大祭の写真（木村政勝氏アルバム）をパネル展示し、町屋の屋根に設けられた、スケールの大きな迫力ある「造り物」の景色を披露しました。

入場者ノートには「さすが歴史を感じさせます」「有難い物を見せてもらいました」などの感想が寄せられました。



橋弁慶



一ツ山



門上段



玉藻前安倍泰成館の場（宙釣狐）新元町



ポーランド大使館  
マウゴジャータ・シュミット外交官も  
古写真展を見学

## 再興「姫路城下にくりだす謡囃子」

(平成三十一年一月十四日)

平成二十九年の秋、平成三十年度事業計画について会議を行う

中、「伊和大明神臨時祭之画図」に登場する「謡囃子」を再現する事が出来ないであろうかと議題に上がりました。



謡囃子実行委員会を立ち上げ、「伊和大明神臨時祭之画図」や「播磨国総社三ツ山祭礼図屏風」、「播磨国

総社図会」などをもとに行列の構成案を組み立てました。

行列は警固を先頭に高張提灯、御幣、大傘、三ツ山踊り保存会の踊り。続いて平成二十九年事業の造り物学習会(三ツ山を造ろう)で制作した十分の一サイズの三ツ山の造り物



の三ツ山台車、姫路・城東連の踊り、警固の総勢八十名の行列を想定しました。

行列構成に基づき、謡囃子に使用する楽器の選定や奏者、踊りの種類・踊り手の育成、行列に使用する祭具や諸役の確保など、課題は山積でした。

複数回の会議を重ね課題を克服すると共に、再興日時の



選定について討論を重ねました。協議の結果、新春の十四日、播磨国総社宝恵駕籠行列と共に「謡囃子」を実施し再興することとなりました。

各諸役では踊りや楽器の練習、ポスター・パンフレットの製作配布、祭具の製作などひとつひとつを





演者も大きな歓声に喜びも一入で、感動の謡囃子を無事に再興することができました。

保存会では、今回の謡囃子を記録し広く顕彰していく為、謡囃子再興記念誌「姫路城下にくりだす謡囃子」を三月十五日に発刊しました。広く活用いただけたらと思います。

最後になりましたが、一般の謡囃子再興に向けてご尽力



クリアし当日を迎えました。謡囃子の行列と宝恵駕籠行列は総勢六〇〇名余り。姫路城下を延々と練り歩く行列に、地元の人々、外国の方々を含む見物の人々から大きな拍手と声援が送られました。姫路駅前に至り、キャッスルガーデンの舞台で大観衆を前に、謡囃子の踊りを披露しました。

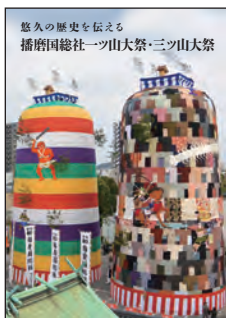
いただきました氏子の方々、謡囃子演者、実行委員会、編集委員の方々、ご協力いただきました関係各位に心より感謝を申し上げます。

平成三十一年度 保存会事業予定

- 一、調査・研究事業  
会報誌第四号発行
- 二、研修会・講演会事業  
手づくり鎧製作学習会の実施  
謡囃子の実施
- 三、会議  
役員会
- 四、その他関連事業・行事等  
小袖の陰干し  
謡囃子パネル展

「悠久の歴史を伝える 播磨国総社一ツ山大祭・三ツ山大祭」好評頒布中!

一ツ山大祭・三ツ山大祭のすべてがわかるこの一冊! 一冊三〇〇円 播磨国総社にて





播磨国総社丁卯大祭礼図

発行 平成31年3月31日

発行所 播磨国総社 一ツ山大祭・三ツ山大祭保存会  
姫路市総社本町190播磨国総社射楯兵主神社内

☎ 079-224-1111 fax 079-224-1114

E-mail hozonkai@sohsha.jp HP <http://sohsha.jp>